

# 花泥棒

1. 良でなかつた中学生時代



昭和二十二年、町にはりんごの歌や、笠置シズ子の東京ブギウギのメロディが鳴り響いていた。みんな空きっ腹を抱えているのに、めっぽう明るかった。戦争中はお正月か、お祭りでもなければこんなに町の中に人は出ていなかった。

戦争が終って、たしかに人の心は浮き立っていた。

商店街はなかなか元通りには復興せず、戦前の綺麗な町並みとはいかなかったが、明るい表情で行き交う人達はみな楽しそうだった。

建物が汚いのは物資が不足していて、どんなボロ板でも使ったからだろう。屋根が有り、周りを板で囲いさえすれば立派な店になる。

木の箱を両端に置き、雨戸を乗せて商品を並べただけの店はあちこちに見られた。屋根なんて無くてもみんな青空市場で生きる為に一生懸命だった。

めぼしい日本の都市はB29の華麗なる洗礼によつてあらかた焼き尽くされていたから、何にも無いのは当然で、あればヤミヤによつて高値で調達され、金額さえ厭わなければ何でもあった。バンバの仲見世通りには、ごさを敷いた闇商人が、インチキに近い商品を並べてそれでも活気を取り戻している。

空襲で焼け落ちた町の商店街は、バラック小屋のような粗末な店が建てられていたが戦争中には無かった勢いがあった。食べるものも着る物も、住む家さえ無くても空襲から開放され、自由を得た市民達の顔は確かに希望に満ち溢れ、明るく輝いていた。

昭和二十二年三月、空襲で焼けた国民学校は、もう直ぐ卒業式だというのに未だ枠組みくらいしか出来ていない。勿論、それまでの授業は空襲の後と同じく、近くの小学校で二部授業だった。一日おきになったり、午前と午後に分けられていて「早く自分の学校が出来ないかなあ」と同級生同志、よく言い合ったものだ。ひとみの学校と世話になっている学校は競争合っていてあまり仲良くなかったのだ。一度、ドッジボールの試合をした事があるけれど、まるで喧嘩のように火花が散った。あの位やればオリンピックの選手にもなれる。けれど、中学に入って同じクラスになったその子達はみんなおとなしくていい人ばかりだった。

世の中は追いついていけないほど毎日変わって行く。

今迄赤い鉢巻をきりりと巻き、なぎなたを手に物凄く怖かった女の先生が、ちりちりのパーマネントで教室に入ってきた時は、悪いけれど、自然に発生した生徒達の笑いはしばらく納まらなかった。

学校の建築は卒業式の三月が来るまでに間に合うわけも無く、とうとうその日を迎えた生徒達は、校舎の出来ていない、枠組みだけの国民学校に集合した。

卒業式だけは、という事で校舎の無い学校の庭で行われたその日の記憶はただ、寒々しかっただけだ。六年生は、まだ建築中の校舎をうしろに記念撮影をしただけの侘しい卒業式だった。

「謝恩会をやる？」

「謝恩会って？」

「先生に今迄のお礼の意味でご馳走するんだよ」

「ご馳走なんて何もないよ。」

「みんなで少しずつ集めようよ」

生徒達が小麦粉や砂糖や塩を持ち寄り、みんなで捏ねたり丸めたりしてフライパンで焼いたが、これ以上貧しいお茶菓子はその後一度もお目にかかった事は無い。

作る場所も無く、学校の近くで空襲に遭わなかった土田愛子ちゃんの家のお台所を借りて、愛子ちゃんのお母さんが手伝って下さった。お茶も多分みんなで持ち寄った緑茶だった。いや、その頃あったのは緑茶ではなく番茶だったかもしれない。そのあと開いた謝恩会は、怖い先生だったので少しも面白くなかった。

卒業の少し前に学校で、生徒達は一回だけとても美味しいけんちんのようなものをご馳走になった。

給食は一級下の下級生から始まったが、新制中学第一期生たちはその恩恵には浴さず、たった一度食べたあのけんちんのような物のおいしさは忘れられないものだった。

昔の学校では、四年生になるとお弁当の時間に当番が二人で大きいやかんを持たされ、小使い室にいくと、江戸時代、石川五右衛門が釜茹でにされたような大釜から、小使いさんが柄杓〔ひしやく〕でお湯を薬缶に入れてくれた。一年生から三年生までは上級生が持って来てくれる。それを教室に持って帰り、各自の机の上に置かれた手のついたアルミのコップにお湯を注いでまわったものだが、その時はその大釜にお湯ではなく、けんちんのようなものが入っていた。

何故けんちん、ではなく、けんちんのような、と言うのかと云うと、その中には軍需物資の残りか進駐軍から払い下げられた物が知らないけれど、魚の缶詰らしい物やコンビーフなどがたっぷりと入っていたからだ。

戦争が始まって以来、魚や肉などの蛋白質になど、ついぞお目にかかった事のない庶民にとって、野菜や芋に慣れきった空きっ腹には、はらわたに沁み入るおいしさだった。

生徒は各自お椀を持って貰いに行った。おいしかった。

「美味しかったねえ」「うん、こんなに美味しいの、今迄食べた事ないよ」とみんなで話し合ったがたった一回きりだった。

その後、給食が始まったと聞き、あんな美味しい物を・・・と羨ましいと思っていたけれど、脱脂粉乳のミルクと不味いパンが主で、美味しくなったのは随分あとになってからだと言った。あまりの不味さに生徒達は脱脂粉乳のミルクを飲まず、学校から帰る時、外に出た途端にどぶに捨てたので、下水は瞬く間に白い水と化したと言った。

小学校を卒業すれば本当は女学校の試験を受ける。それに備えてその受験勉強をしていたが、進駐軍の命に依り、という事で学制が変わるらしく、決まるまで学校はお休みになった。

その間にひとみの遊び癖がついたとみえる。

戦争前からやっていたひとみの父親の電気店は空襲で焼けてしまった。終戦になってから父親の政治郎と三人の娘達がリヤカーで毎日通い、道具もシャベルだけ、軍手も無いから素手で整地した。電気の本が空襲で焼け、溶けて飴のように固まって大きくなっているのを掘り出す作業はとても大変だった。まわりは全部焼けてしまっているから暑さをしのぐ何物も無い炎天下、父親と三人の娘が汗水たらしながら一生懸命やった。そこに近所の人が自分のうちを建ててしまったんだからみんながっかりした。空襲で壊れて未だ復旧せず、噴出している水道の水でのどの渇きを癒しながら、綺麗に整地して建てる為の資金の金策をしているうちに、ほかの人が無断で自分の店を建ててしまった。この頃は無法時代で、やった方が勝ちというような感じだった。でも、それは人に何と言われようと平気な人の話でいつの世にもいる。実際には良い人も多かった。

土地はこの辺一帯を或る私鉄が所有していた。未だその支社も空襲の後出来ていない。

そんなわけで前のところには建てられなかったが、政治郎の中学時代の同級生で市内一番のパン屋のパン富さんがいて、困っている政治郎に救いの手を差し伸べてくれた。

たいした資産家で東京から倒産して流れてきた一家をその頃から良く助けてくれていたが、

今度は自分の店の隣を貸してくれた。

仮住まいではあるがこのお店のお陰で一家は何とか食べていける位の生活が出来るようになった。

このお店は狭いので祖母のとりがひとりで住み込み、父の政治郎が疎開先の自宅から通った。

「おばあちゃんひとりでは物騒だから今度から亜紀子と登志子がお店に泊まれば？」という事になって、女学校は疎開先から通うよりお店から通ったほうが近く都合が良いので二人は店に移った

。その頃電気屋で売る商品はガラスで出来た電気の笠と懐中電灯、安物の電熱器と電球と電池くらいしかなく、おばあちゃんにも、孫達でも売る事は出来た。この頃の最高級品はラジオで、難しいラジオなどうまく説明出来ないし、高いので大概月賦だった。だから修理や配達に行った主人の政治郎が戻ってからも結構間にあった。

食糧事情の極端に悪い戦後は住み込みの従業員を置く事は無理で、

「食べさせてくれるだけでもいいから置いてくれ、」と頼まれる事は再々あったが、何処でも子供を飢えさせない位で精一杯だった。



お店の仕事は店員がいなくても、電球や電池を売る位だから女の子でもいくらかの手助けにはなる。

店は繁華街にあって父と祖母だけだから、暇さえあれば店に行き、手伝うようなふりをして、ちょいとお金をくすねてはお菓子を買って食べたり、映画を見たりしていた。

十円あればお菓子は充分食べられた。

「じゃあ、おばあちゃん、帰るね」といって十円を手に入れば占めたもので自転車に乗り、映画館に向かう。

その頃、外映というのが流行り出し、映画館のうちの半分は外映専門だった。

学校がいつ始まるかも判らず、うちにいてもあまり面白くない。その頃はどこのうちでもほんの少しの土地さえあれば、足りない食料の足しになるようにと、ほうれん草やじゃがいもを植えていた。

こやし汲み取りだって人に頼めばお金を取られるし、これは作物のこやしになる。うちにいるといつもお母さんに

「ひとみ、済まないが、こやし汲みの手伝いをしておくれ」と肥え担ぎの相棒をやらされた。

お店に行けばおばあちゃんしかいないので、手伝いをするという口実は立派に成り立つ。町に出た方が面白いし、お店に行ってしまうえばお金をくすねるチャンスはいくらでもある。

くすねてしまったらもうお店に用事は無い。

お菓子を買って、いつの間にか映画まで見るようになっていた。昼間、姉達は学校だから、帰って来るまでにお金を少し戴いてしまえばよかったのだ。

そのうちに新制中学という制度が出来、学校は始まったが遊ぶ方はしっかりと身についてしまった。

新制中学一年生は一学級六十名前後で二十四クラスのマンモス校だった。外地からの引揚者が沢山いたから子供の数も多かった。

。戦前からあった二年制の西原校、東山校の高等小学校の二校が我々の受け皿となった。ひとみの行った学校で一番思い出に残る良い学校だった。

時々は詰らない授業だと、

「先生、うちで忙しいから早く帰るようにいわれました」「そうか、良く手伝いをするんだぞ」といわれてすんなりと通った。親戚に疎開していて親が三月十日の東京大空襲の犠牲となり、帰る所も無く、戦後厄介者扱いされて学校に行かせて貰えず、女中に出されていた生徒もいた時代だから、店の仕事といえは簡単に認められた。

その頃は先生が足りず、自習させられた時もあったりつまらなかったし、いい映画が入ると待ってなどおられず、嘘をついて早退し、学校の帰りに映画館に直行する事もあった。

ひとみの見る映画は、いわゆる外映だった。電気館専門で、たまに

映画が終わると少し明るくなる。見終わった人は帰るが、途中からしか見てない人や、もう一度見る人は残る。閑な人は一日中見ている、追い出されるような事は無かった。

明るくなる幕間〔まくあい〕はほんの少しの間だが、まわりを見ても子供は一人もいない。

誰にも聞かれないのに、「後でお母さんが来るので」なんて言い訳をした。わざわざ自分から言うなんて今思えばおかしい。どうせ来ないのは分かっている癖に、でも、聞かれたら、

「お母さん、どうしたのかな？」  
と言うつもりだった。相手も少し大きいだけで同じ穴の貉〔むじな〕だったのかも知れない。聞くわけないよ。向こうだって真昼間から映画を見ているんだから。

そうだ。そういえば向こうは何をサボっていたのだろう。カバンを持ってオカッパ姿なら誰が見ても学校サボっている小学生か中学生かは分かるがもう、この映画だけは止まらなかった。

授業をサボって映画を見て、出てきたところを同級生の男の子に見つかって先生に言いつけられたが、先生は笑って、気をつけろ、と言っただけだった。戦後は全体に自由な風潮だった。かくの如くひとみの中学時代は映画とは切り離せない。

或る日、映画を観たあと暗くなってから家に帰ったひとみは「お前、毎日遅いけど何処に行っている？」と母親に言われ「なんで??？」と聞き返した。「お父さんが、ひとみは良く出かけるよと云っていたから」と言うのでさんざん考えたあげく、観念して「本当は映画」と叱られるのを覚悟で言った。そうしたら「お前、お前だけずるいよ、お母さんも行くよ」と云って今度は母も行くようになった。

こんなにうまくいくとは思わなかった。多分広告を見て母も見たいと思っていたのかもしれない。よほど母は映画を見たかったに違いなく

「今、何か見たい映画はあるのかい？」

とその日の夕飯のあと聞かれた。見たい映画なんて全部見ていたら、お店から持ち出すお金では足りない。

「お金どうするの？」

と聞いたら、

「くずやに鉄くずを売るよ、今迄もお金が足りないとかくずやのおじさんに小屋の物を売っていたら？」

と言われた。鉄くずを売るとお父さんに文句を言われるが、いつも二人はグルだった。だって、お店にはいつもお金があるけれど、自宅には無い時の方が多から背に腹は変えられなかった。

それに航空廠から払い下げを受け、めぼしい物は仲間の電気やさんに平等に分けてしまっていたが、訳の判らないような誰も持っていかなかった金属が沢山小屋に入っていた。お父さんは使っていないし、今迄だってお米を買う為に結構売ってしまってもお父さんは気が付かないくらい沢山あった。それならお金は大丈夫だ。

しめしめ・・・・・・・・

見る映画は二人で相談してから決める。

二人で行く時は夜だけれど、学校をサボって昼間見る時は一人だ。

そういう時は見た映画のあらすじを話す。サボって映画を見ても叱られた事は無い。おかしなお母さんだった。母は後年良く言っていた。

「お前のお蔭でいい映画を沢山見せてもらったよ」と・・・

見る映画が決まると、二人で示し合わせて夕飯を早く済ます。

その時は、断り切れなかった或る村の裕福な村長さんの息子さんが、自分の食料持参で技術を教えて欲しいと住み込みで入っていたから留守番は心配ない。妹と弟を彼に頼んで駆け足だ。

映画館に駆け込むと、今食べてきたばかりの雑炊やら、麦のほうが多い夕飯の事など忘れて、ジャンマレーの美女と野獣の世界に浸る。私はいつの間にか美しい王女様になってジャンマレーの王子様と一緒に二人 手に手を取って雲の上を飛んでゆく。

又、総天然色と言ったカラー映画で見た船乗りシンドバットの冒険は、学校帰りに一番うしろで背伸びして二度見た。花屋敷だった。

映画には美味しい物もいい洋服も、素敵な車も家も家具も揃っていて、そして、みんな美男、美女だった。鏡の前で見比べなければ、ヴィヴィアンリーになることだってクレオパトラだって可能だ。

ローレンスオリヴィエやタイロンパワーに抱かれていると思えばいいのだ。映画が終わって外に出たって真っ暗だ。しばらくは、その雰囲気になれる。

あの頃、映画はしばし、現実から我々を逃避させてくれた。後年、ひとみの姪（姉の子と妹の子、二人は仲が良かった）が高校をサボって大問題になりかけたことがある。二人で東京に行き、映画を見たというだけで・・・

ひとみは姉に

「何大騒ぎしているのよ、そんな事、自分だってやったじゃないの？」

といたら、

「しーっ、そんな事言わないでよ、昔と違うんだから」と言われた。やりかたが下手なんだよね。

学校サボって、学割使って、〔往復三百七十円だったかな〕銀座なんかも歩いたなあ。歩いただけだけど。カバンをぶら下げてセーラー服で歩いていたら、うしろのほうで、

「家出少女だな」

という男の声がした。でもそれだけだった。

(一人で東京にいったのは高校に入ってからだけど)

その頃の交通手段は汽車だった。石炭焚いて、良く真っ赤に燃えているところを見に行った。機関士がシャベルで次から次へと石炭を抛りこんでいてとても面白く、いつまで見ても飽きなかった。

窓をあけると、石炭がらが髪の中に入って、後で髪を梳かす(とかす)と小さなからが出てきたっけ。

誰にも何も言われなかった。尤も、ばれるような下手はしなかった。ばれても怒られなかったと思うよ。その位。

ま、今も昔も、少々不良か、でも、大人のやる事をちょっと早めにしただけだ。

昔の商人はいくつもある映画館が全部はねる(終わる)まで店を閉めなかった。映画を見た沢山の人達が、帰り道で買い物をしてゆく。それで終わりだ。



だから、急いで帰ればお父さんが帰る前に家に着く。いつまでも王女様ではいられない。特にうちの父はオンボロとはいえ、自動車であまり早い。あの映画館のある繁華街からうちの近くにある火葬場の通り迄を、お父さんが帰るより早く着かなければならない、というのが一番の問題だった。

でも、あの頃は夜でも自動車が走る事も無く、オートバイも無かった。交通手段は自転車だけだ。

音の無い夜はただ、静寂(しじま)の中にあった。父のオンボロ自動車のエンジンの音は、赤門の角を曲がると一キロはあるのに商業学校の入り口で聞こえた。〔本当に信じられないほど静かだった〕

すると、ソレッと二人で走り出す。

「お母さんがお風呂をたきつけるから、お前は水だけど飛び込めっ」という事で水風呂に飛び込むと同時にガラッと玄関の戸が開いた時もあった。空襲で焼けた後の市民のお風呂は大体ドラム缶だった。そのドラム缶の所に母が来て、

「ぬるいかい？」

などと云って、(首をすくめて笑いながら)新聞紙で焚き付けて、暖かくなるまで燃してくれたものだった。

(ぬるいんじゃないよ、冷たいんだよ)

昔はみんな夜遅くまで働いたものだ。寒い時でも火鉢は一つ、おばあちゃん用しかない。震えながら紺色のトッパーを着てみんな遅くまで働いた。お客様もかじかんだ手をこすりあわせ、はあはあ息を吹きかけながら入ってきたものだ。

そんな時の外映は、現実の辛さやひもじさをいっとき、忘れさせてくれた。そうでしょう、いつでも映画さえ見ていれば王侯貴族になれた。悲劇のヒロインにもなれた。

たった一つの誤算は大きくなるとひとりで、生きたフランス人形といわれたダニエルダリユーや、クレオパトラになったエリザベスティラーのように美しくなれるのだと思った事だ。

あらゆる素晴らしい女性の人生を歩めた。

それまでに姉達の読む岩波文庫や世界文学全集も多少読んでいた

。なにしろラジオしか無く、本でも読まないかぎり楽しみなんて何も無い時代だ。活字でさえあれば夢中になって読んだ。ああ無情、椿姫とか、モンテクリスト伯などは暗記するほど読んでいた。娯楽は他に何も無い時代だから繰り返し読むしかない。岩波文庫の椿姫は、何で椿姫というのかな？なんて思ったものだ。椿のように綺麗という意味かな？うちに咲いていた椿は薄い桃色の一重（ひとえ）で、そんなに華やかではなかった。

戦時中は近所に古本屋があったから少しは借りて呼んでもあとは全部ただ読みだ。海底二千マイルなどはその時に読んだ。海の底、海底二千マイルで、潜水艦ノーチラス号の中に農場を作り、野菜や砂糖きびを植え、砂糖を作る話には戦時中、甘いものに飢えていた我々には驚き以上のものがあった。

なにしろ、戦争中なんて川田正子の前線（戦線）へ送る夕べのラジオ番組位しか娯楽は無かったのだから、近くに古本屋があっただけでも幸せと思うしかない。

それらがオーバーラップして頭の中には一種独特の世界が作り上げられている。今でも素敵なお人とは、映画の中にいる人で、ステテコなんかはく人ではない。

ただ、そういう素敵なお人と並んで鏡の前に立たなければいいだけだ。

あの頃のひとみは断じて不良ではない・・・が良では無い事も事実だ。

お父さんの為にとひとこと

お父さんがうるさかったのではない。男女同権と云っても、戦後間もない頃はまだ、お父さんに聞いてからでないと（夜など特に）勝手に出歩けなかった。今はもう、好き勝手放題だが、あの頃で言えば止むを得なかったかなあ。

まして中学生においておや??????

- ・昭和二十二年四月二十五日新校長着任
- ・新制中学第一期生として
- ・同年五月五日昭和九年生まれの一年生入学（千四百五名）
- ・全部で二十四クラス〔ひとみは十九組〕

以上

## 昭和二十三年 中学二年生、社交ダンスレッスン始まる

空襲で市の中心部が殆ど焼けたあと、町はずれの学校に転校したひとみはどうしてもその学校に馴染めず、元の学校に戻りたいと駄々をこね、母と二人でお願いに行った。空襲のあとは焼け野原で何処にいても隠れる所は無い。それで戦闘機P51に依る連日の機銃掃射となり、地上にいる人間が標的となった。

勤労奉仕中に中学生が機銃掃射に遭い、急いで防空壕に駆けつけた時はもう満員で頭しか隠れず、腰の方から撃たれて犠牲になったと聞くと、神社付近を清掃奉仕していた女性が血だらけで馬車に乗せられて行く姿などが噂になっていた。

そんな毎日なので校長先生が許可するわけも無く、その帰り道で二回、ほんものの機銃掃射に出くわした恐ろしさに二度と復学を口にする事は無かった。

「戦争が終わったら又お会いしましょう、と校長先生がおっしゃったんだから・・・」

と終戦の直後、ひとみはそう言って直ぐ転校の書類を貰った。もう繁華街に父親の電気店は出来ていたのだから、そこに寄留するという口実で許可が下りた。

その書類を持って、その足で村役場に母と出かけたが、バスなんて一日に何本も通っていないので、歩いていたら馬車が前に行く。急いで駆けて行って乗せてもらった。

バスはあまり頻繁に出ていないけれど、馬車は良く通るので何度も乗せてもらったが、大変のどかなもので学校帰りなど馬車を見るとおじさんに頼んでは乗せてもらった。

それからは歩いて行ったり、たまに自転車に乗って通学したが、毎日行き帰りにはお店に寄っておばあちゃんの手伝いをした。

昭和二十年初秋の頃、ひとみは念願の元の学校に復帰していたがそれから幾らも経たない頃、占領軍が大挙して、文字通り進駐して来た。

昭和四十八年の東京オリンピックの時の聖火は北の方から東京に向かったが、進駐軍は東京方面から逆に北へ向かった。その季節は大体同じ秋の頃だった。

東京街道を北に行き、突き当たって西に曲がり多分、市のはずれの練兵場〔日本の軍隊、四十四部隊が駐屯していた所〕にキャンプを張って、それから又仙台とか北部方面に向かうのだろう。

敗戦国民の我々は、みんな国道の沿線にむらがり、言葉も無く呆然として眺めていた。昨日の敵に手を振って迎えた人も多かった。

。

延々とカーキ色のジープやトラックが続き、ヘルメットを被った兵隊達の姿が目に入った。兵隊達も手を振ってそれに応えた。空の青はあくまで澄んで高かった。

それから学童達の生活にも変化が起きた。校長室の前の校庭に並べられた椅子に座らせられ、頭を下に向かせられると、真っ白いDDTの粉末をシュッシュッと吹き付けられた。

蚤や虱がはびこっている最中で、これは何度かやられたが、あまり気分の良いものではなかった。これをやられるとしばらくは髪の毛に櫛の目が通らなかった。首筋からからだの中へもシュッシュッとやられた。

子供心にもプライドは傷ついた。けれどあの頃の衛生状態では、蚤、虱、ダニなどの撲滅はこれでは出来なかったのだから仕方がない。惨めな思いはしたがかゆいかゆいからは逃れられた。

教科書の書き直しも指示されてやった。

学科では歴史の教科書が一番多かったが、先生の指示に従い、ところどころに墨で線を引き、消すように言われた。

“神風”などと言うのは一番先に墨を塗らせられた。

教わった事の否定だった。歴史が好きだったひとみは、覚え始めていたところを消すように言われ、何だか判らなくなり、歴史への興味は失せてしまった。

昭和二十一年も戦争中と同じだった。なぜならひとみ達は戦争中と同じく、焼けてしまった校舎は未完成で、やっぱり二部授業だったからだ

戦後、疎開先から帰って来るのにも、焼けたあとを片付けるのにも、誰も彼も直ぐと言うわけにはいかなかった。

ひとみの家も直ぐ再建に取り掛かったが、思わぬ事態が出来〔しゅったい〕したりして、落ち着いたのは昭和二十二年あたりからだ。

その翌年、二十三年に中学二年生になっていたひとみにびっくりするような事が伝えられた。

上の娘三人が父に呼ばれ

「明日から社交ダンスの先生が来るから夕方の六時までに仕事場に来るように、ズックを履いて綺麗にして・・・」

というのだ。綺麗なんて言っても、よそ行きなんて無い。

生徒は両親と姉二人、ひとみとお店の番頭さんだ。  
場所はうちの仕事場として使っていた汚い板の間だった。

先生は父がいち早く手にいれた幌型のダットサンで迎えに行く。  
東京育ちのお父さんは大変モダンで自動車を買ったり、ダンスを習ったり、お金が掛かるだろうなと娘達は思った。  
私達の生まれる前から写真を撮って、焼き付けて、引き伸ばして、現像してそれだけでも人よりお金が掛かるのに・・・だからお金が無くて質屋なんかにも行くのだ。質屋に行ったら組は違うけれど、コーラスなんか一緒だった同級生が出て来て恥ずかしかった。

でも、ダンスを習うなんて思ってもいなかった。アメリカの映画によく出てきたけれど、自分があのアメリカ人のように抱き合っ  
て踊るなんて思った事も無かった。それに私は未だ中学二年生なのに、習わせてくれるなんて・・・大満足だった。

お母さんも普通ならお金のかかる事は文句を言うのに、映画の時と同じく自分でもやりたい時は文句は出なかった。

先生は戦争前、関西の歌劇団でバレエを教えていた方で、戦争直後はバレエを習う人なんていなかったからうちなんかでも来てくれる事になったのだろう。



初めてお会いした先生に娘三人は並んでご挨拶をした。先生は私に

「あなたはお幾つ？」

と聞かれた。上は女学校なので聞かなくても年はわかる。

「十四です。」

すると先生はびっくりして

「大きいねえ、お姉さん達と同じだ、でも学校には言わないほうがいいね。お姉さん達もね」

と念を押された。戦争中は流行歌を歌うと不良だといわれたし、ダンスなんて退学ものだ。戦争中女学校に行っていた姉の亜紀子が、その頃流行っていた高峰三枝子の湖畔の宿を口ずさんでいたら、不良だと云われた時代だ。戦争が終わったばかりでは未だ未知数だった。

先生はバレエの先生らしく、細身で素敵だった。

この頃の人で細身で無い人はいない。食糧事情が細身にさせていたのだが、さすがにこの先生は抜群にかっこ良く細身だった。週に二回くらいやった。先ず先生は歩き方から教えた。姿勢についてとても厳しく、少しでも型がくずれるとやり直しをさせられた。

きちんと背筋を伸ばして最初はただ歩くだけ。  
だんだんに腕を前に組むようにして歩かせられた。男の役も女の  
姿勢も皆、両方やらされた。

スロースロークイッククイック、リバーターン

ハイ背筋をピンと、伸ばして伸ばして

スロースロークイッククイック

ナチュラルターンハイッスロースロークイッククイック

音楽に合わせてやれば尚一層楽しい。楽しかったなあ。

ワルツ、フォックストロット、タンゴ、ブルース・・・

父はそういう方たちとも音楽を通じ、又それをかける電蓄の販売  
や修理を通じて親交を戴いていた。自分でもマンドリンをやるし  
、素人のそういう楽団にも入っていた。だから音楽はお父さんのお  
手の物だ。

音楽が好きで、いいレコードが燃えないで残っていた事は大変都  
合が良かった。コンチネンタルタンゴの真珠とりのタンゴ 夜の  
タンゴ、バラのタンゴ、イタリーの庭 奥様お手をどうぞ、やア  
ルゼンチンタンゴのラ・クンパルシータ エルチョコクロなど、あ  
の汚い仕事場でよくやったなあと思う。

そのうちに二宮さんと鳥羽さんというダンスの先生クラスの人が加わってもっと賑やかになった。その夜はお母さんが心をこめて作ったお茶菓子代わりに西洋料理〔勿論材料が無いからあり合わせのインチキ料理だけ〕がみんなをダンスと同じ位の引力で惹き付けた。

さつまいも、じゃがいも、かぼちゃ、むぎめし、雑炊が主だった頃、お母さんもダンスの為にはありったけの物を用意した。それだけダンスは惹き付ける魅力があった。

あの頃ダンスホールなんて無かったから、仕事場がダンスホールだった。のちに二宮さんは国際ダンスホールの専属の先生になり、鳥羽さんは仙台の高等専門学校を出ていたので公務員として東北の方へ赴任なされた。

一応一年半くらいやってレッスンは終わった。

ひとみが中学三年生になり、高等学校の受験が間近になった事と、一と通り踊れるようになったからだ。

パリスバレエ団の先生も本来のバレエの先生を始めたのかもしれない。戦後のあんな時期だったからこそ、普通では教われないような素晴らしい先生に、手を取って教えて戴いて本当に感謝している。

のちに父と母は、終戦直後初めて取引先の会社の招待で旅行をした時、二人で踊って驚かれたという。

ダンスをしたのは一番早かったんじゃないかな。

私、七十も過ぎていますが今でも踊れるよ、歌劇団の先生に教わったからね。

初めての体育の授業でバットでボールを打って  
三塁に走ってしまった。

ひとみの新制中学第一期生としての滑り出しは、お店の手伝いと称してお金をくすね、お菓子を買って食べたり映画を見たり、誠に調子良く進んでいたが、そのうちに罰が当たって毎日、気持ちが悪く、お弁当は学校の近くの竹やぶに棄てていく日が続いた。何か悪い物でも食べたらしくだんだんに酷くなった。一緒に帰る友達に

「早くお母さんに言わないと大変だよ」

と言われても、気が強くて強情なひとみはその日、フラフラで校舎の壁を伝って歩いているような有様であったが、前の日のようにお弁当を棄てて、自転車で三キロの道をふうふう言いながら帰った。

帰ってしばらくしたら母の声で

「お風呂に入っておしまい・・・」

と言われたので、寒けがして入りたくなかったが、具合の悪いのを隠していたので仕方なく

「はい」

と返事をしてドラム缶のお風呂に入った。

お風呂は水だった。

「お母さーん、沸いていないよ、まだ水だよ」

と大きな声でお母さんに云ったら

「そんな事ないよ、おかしいね」

と言いながらドラム缶の傍に来て、ひとみの顔を見るなりアレツと云って額に手を当てた。

「直ぐ出なさい。相当熱がある。黙っていちゃあ駄目じゃないか」  
と言われた。ばれたか・・・・

その時はもうひとみは限界だったので観念して云う通りにした。

母はすぐふとんを敷いてひとみを寝かせ、夫に電話をして医者  
の往診を頼んだ。熱は三十九度以上あった。

お風呂の温度より体温が高いとお湯は水と体感するのだと宏子  
は思った。

それから約一ヶ月、毎日父の友人の高島先生の往診を受け、すっ  
かり良くなって学校へ戻ったら、前の女だけの組は編成替えされ  
ていて、本田先生には一度も教わらないうちに今度は男女一緒の  
組になっていた。良かった。本田先生は図画の先生なので、ひと  
みの最も不得意とする学科だった。今度はやはり女の先生で塚原  
シマという戦争未亡人の国語の先生だった。国語ならいいや、  
と思った。

私は国語くらいしか出来ないもの。

思春期に入りかけている女の子が一ヶ月も絶食に近い状態で寝ていて完全な健康体に戻ると、身長は目一杯伸びてしまいうらしく、もともと大きい方だったひとみはもっと体格が良くなっていた。小学校では小さい順から一班から六班に分けられていたが、五班になったことはない。一番大きいわけではないが後ろから何番目と言うくらいの背の高さだった。

背の高さが判らないわけではないのに先生は、晴子のいない時に四の側〔南窓際〕の前から三番目に席を決めてしまっていた。しかも生徒の数が多すぎて椅子も机も足りない時だから、いないのをいいことに三人掛けの真ん中にしてしまった。座り心地は抜群に悪いので、誰も三人掛けの真ん中は嫌がったから、いないうちに真ん中にされてしまったのだ。私は前から三番目に座るほど小さくはないので二つの椅子からいつも落ちそうだった。左側はおとなしい女の子で右側は優等生の男の子だったが、いつも椅子からはみ出しそうで右に寄ったり左に寄ったりしていた。

初めての登校日、ひとみの着ていった洋服は進駐軍の将校さんの奥さんの着ていた物凄く派手な古着だった。

父はとても進歩的な人で、占領軍が入ってきてすぐ司令部に行き、仕事を貰うようになった。片言の英語だけれど、結構通じていて将校さんも兵隊も足繁く店に来た。

進駐軍の仕事をするようになった父の本当の目的はガソリンだった。

戦争中から修理などで縁のあった警察が、オンボロの幌型ダットサンを五百円で払い下げるという話を聞いて、昔から機械に強い父は免許証も無いのに、直ぐ借金をして買ってしまったのだ。

戦争直後の免許証なんて試験場を先生と話をしながらグルーツと回ればOKだったと後になってお客様から聞いた。

その頃、個人で自動車など持っている人は居らず、ガソリンも自由に買えないと知った父は、進駐軍の仕事をする許可になると聞き、急いで司令部に駆けつけたという次第だ。

進駐軍の仕事をするようになった父の本当の目的はガソリンだった。

きのうの敵は今日の友、というわけで、空襲でここに爆弾を落としかもしれない占領軍の兵隊だって今は良い友人だ。

少しでも話の通じる所へ遊びに来たいらしく、店にも、自宅にも本当に良く来た。でも、普通の家に来るような人は皆真面目な人だ。

戦争中でもうちには水兵さんが三人位、休暇の度に遊びに来ていた。

戦争中は特殊な女の人の集まる所位しか、遊興施設は無く、軍隊から頼まれて、普通の家が兵隊さんを接待したのだ。

そして小遣い銭欲しさに、いろいろな物を持って来るようになった。

食べ物はミルクキーウェイが多かった。それにキッスという先の尖った丸いチョコレートやチューインガム、缶詰もあった。

うちはでは子供が多いのでよく持って来た。

戦争中から衣類も無かったので父は将校さんの奥さんの古着を買ってくれた。その中でもライアン中佐の奥さんは、若くて綺麗で中佐と一緒に来る事が多かった。その時、着ていたセーターとスカートがとても気に入った父は娘に着せようと思って

「そのようなセーターとスカートが欲しい」

といったら、

「OK」

と次の日持って来てくれた。多分、安物だったようだが色だけは目も覚めるような黄色いセーターと黒いビロードのスカートだった。



姉達はセーラー服に白襟、白いリボンと言う女の子の憧れの制服だから着られない。専ら進駐軍の古着はひとみの専門だった。チューリップを逆さにしたような半袖の、目の覚めるような真っ黄色のセーターに真っ黒のビロードのスカートをはいて、病み上がりの初日、学校へ行って席を指示され、座ったら隣の男の子の第一声は

「喫茶か？」（商売は）  
と云われた。〔ま、失礼〕それは強烈に印象に残っている。大分どころではなく、えらく派手だったから仕方ないけど。

良く観察すると、普通の組で成績が良いぐらいの人は十人位いた。この学級は凄い、えらいクラスにはいってしまった、と思った。

私はすでに一ヶ月以上遅れていた。代数がチンプンカンプンだった。英語は、新制中学になる前のお休みの時、病気になる前に少し習いに行っていたし、日本語で書いてある教科書ならどれでも理解は出来たが、代数だけは教科書を見てもどうしても判らなかつた。

或る有名な日本の画家が中学生の時、算数の試験で最大公約数とは何か、という問題が出た時、最も大きい公〔おおやけ〕の数〔すう〕と書いて笑われたと本人から聞いたが、私もそんな答えを書きそうだ。

授業中、先生がわきを通った時訴えた。

「病気で休んでいたので全然判りません」

「お姉さんかお兄さんはいないの？」

「姉が二人、女学校に行っています」

「じゃあ、お姉さんに教わりなさい」

生徒が多くて先生が足りない位だったから面倒くさかったのだろう。お姉さんとは喧嘩ばかりしていたから、教えてなんていった事は無い。だから今でも算数は一番嫌いだ。

算数の時間が終わればお弁当の時間だ。

みんなお弁当を持って来るが、小学校で出たお湯などはもう出なくなっていた。食後のお茶は鉄管ビール〔水道の水〕だ。

戦争に負けて物質的な余裕は全く無くなっていった。

お昼になって私は隣の子のお弁当をチラと見たら、白いご飯に塩鮭がのっていた。しばらくお目にかかった事の無い銀シャリと塩鮭、それはいつまでも私のどこかに焼きついて離れなかった。自分の弁当箱の中身はと云うとごはんは麦飯で、おかずはお母さんと担いだ肥え桶〔こえおけ〕の肥料で育てた不出来のかぼちゃと茄子の煮物だった。

この頃はお弁当を持ってこない子もいた時代だ。お弁当の蓋で中身が見えないように隠す子も多かった。

私は隠さなかったが、塩鮭と白米はまぶたの裏に焼きついた。

蓋で隠すくらいならまだいいが、戦争中もそうだったように、お昼になるといなくなる子もいた時代だから、お弁当は持ってこられるだけでも有難い時代だった。

尤もお弁当の中身が良すぎて隠す場合もある。聞いた話によると戦争たけなわの頃、お弁当の時間に

「皆さんの中で白いご飯をお弁当に持っていらっしゃった方」

と先生が質問したら、宮様だけが「ハイ」と元気良く手を上げられた。

翌日から宮様のお弁当は雑穀の入ったふかしパンになった。当然宮様と同級生になる位の子の父親は華族様とか余程の上流階級であり、白米をお弁当に持ってくる位たやすい事だが、さすがに宮様より世間を良くご存知で、白米を隠すように上に何かをかけるとか、海苔巻きのおにぎりにしてしまうとかで決して白米を食べているようには見せなかったが、純粹培養の宮様はそういう考えには到らなかった。そういう人もいた時代だ。

生徒会の会議が講堂であった時、和代ちゃんが手を挙げて次のように発言した。

「週に一回、お弁当にさつまいもを持って来る日を決めたいと思います」

これは全員が賛成して可決された。

彼女の父親は弁護士で家庭で食料に困るような事はありませんでした。

はじめの頃の体操の時間は教室で待機して外には出なかった。

今日からはいいだろう、と体操の授業を受けられるようになった日の最初の時間はソフトボールで、ソフトボールという名前も知らなかった。今までドッジボールしかやったことはない。が、棒を渡されて立っていると、先生が

「そこに行け」

と言うので、小さな猫のふとんのような物のわきに立った。

するとボールはひとみの脇を飛んでいった。

そしたら

「打たなきゃ駄目だっ」

と言うので、次は打った。

ボールは棒に当たって飛んで行ってしまった。

そのまま立っていたら今度は

「駆けなきゃ駄目だっ」

と又いうので左の方に駆けて行った。その後、どんな風だったか

これ以上は書きたくない。云わなくても分かる筈。

全員しばらく笑いが止まらなかった。初めてなんだから、教えてくれなきゃあ出来っこない。先生が悪い。

〔何か体操の先生が新入りのひとみをからかったようだ〕

それからのひとみは、ボール恐怖症になりどんな球技も駄目になってしまった。あんなにはしこくて何でもやったのに、球技だけは身がすくむ。今でも球を受けることは出来ない。

でも逃げ足は速いよ。

逃げ足速かったから花泥棒をやった。やっぱりお母さんと一緒だ

。ひとみの姉妹はみんなはしっこくしてお転婆だけれど、病気がり始めて出た体育の時間に、ソフトボールのボールを打ったあと、何も知らなかったので走れと云われて三塁へ走ってしまい大恥をかいてから、あらゆる球技は駄目になってしまったが、駆け足は昔から速かった。小学校の時は姉さん達と二つずつ歳が離れていたから、一、三、五年と二、四、六年と二年間一緒だったので、運動会のリレーには三人共揃って赤組で出た。少なくともみんなお転婆の要素は人より持っていたようだ。それからは走る方の専門だった。

中学が始まるまでは一ヶ月くらい休みだったから裏の山へよくたきぎを拾いに行った。たいがいは枯れた杉の枝で、あちこちに落ちているものを拾い、籠に入れて持ち帰る。山を登って左の方へ進むと火葬場〔やきば〕になるからいつでも行くのは右手の方だった。

いつ学校が始まるかまだ判らないし、たまにお店の手伝いをしたり、映画を見たり、でも大概は戦争中に建てた未完成の家で母と一緒に過ごした。

この頃はいろんな思い出がある。三月の小学校の卒業式以来、二ヶ月位学校は休みだからそれまで一番多かったのは薪（たきぎ）拾いでいつもお母さんに行った。

頃は四、五月春爛漫、山に登りきって西の方を見ると、蓮華、菜の花の真っ盛り、その彼方に見えるのは日光の連山で、ここまですずっと繋がっていて、昔は鹿が山伝いに日光の山から来たという話もあったらしい。此処から見える蓮華と菜の花の絨緞の美しさは絵には到底描けないほどで、もう、そこまで行くのが待ちきれないほど楽しかった。

「お母さん、来て、早く、早く」  
たきぎもとりたいが、あの綺麗な菜の花の黄色と蓮華の赤紫は早く見ないと損をするような気持ちだった。  
桜の咲く頃はもう夢中だった。あたり一面、霞か雲かと言う情景だ。

戦争中も薪を拾いに同じところを登ったが、花なんて見ている余裕はなかったような気がする。地面ばかり見て、何か食料になるようなきのこや栗は無いかとキョロキョロ探していた事は覚えている。

台風の後、栗でも落ちていないかと山に行ったけれど、未だ落ちる季節ではないのか拾えなかった。そしてざる一杯採って来たきのこを近所のじいさんに調べてもらったら、一目で毒きのこことわかる“笑いたけ”と、“月夜たけ”と言われてがっかりした。まれにはちたけやねずみたけが採れたので、それを炒めて味付けし、炊き込んだきのこご飯の美味しさは天下一品だった。ちたけは茄子と炒めたり、うどんのつけ汁に入れたりしたが今はまぼろしとなってしまった。

そこを登りきって右手の尾根伝いに北の方に進み、更に右手に少し行き、東にくだって行った時、そのくぼ地に二人は桃源郷を発見した。

薄暗い林を東の方に降りて行くと、暗い地面に水仙が咲いている。良く見るとチューリップも咲いている。それも少しではない。あたり一面足の踏み場も無いほどだ。山奥に自然にチューリップは咲かない。

ここは天国か？

上を見て、桃源郷と思った。中国の仙人の出て来る神話を戦争中沢山読んだが、まさしくここはあの神話に出て来る桃源郷だ。色とりどりの桃の花が、一重、八重、桃、白、赤白の絞り、初めて見る桃源郷に二人は狂喜して

「お母さん、ここはなあに？ウワーッ凄い」「ウワーッ」

水仙があんなに華やかなものと初めて知った。桃のあでやかさに桃源郷の意味も知った。椿の種類の高さも知った。桃や水仙と同じく一重、八重、しぼりなどうちの裏庭に咲いている椿には悪いが、あの頃どこにでもあった一重の赤や桃色の花でどうしてあんなので椿姫なんだろうと思っていたが、ここにある椿なら良く判るほど華やかだった。



ふとんの中にスタンドを持ち込み、内緒で読んだ岩波文庫の椿姫の華やかな生活はわかったが、どうして椿姫なのか理解をするにはあんまり綺麗な花とは思えなかった。

ここを先に見ておけばすぐ理解できたのに・・・・・・・・  
あまりの綺麗さに・・・・負けた。

悪い事とは知っていたが、二人で夢中になって水仙を取り、チューリップを取り、桃や椿の枝を折った。抱えるほどとっても、少しも減ったようには見えない。

何でこんなに沢山あるのだろう。いい香りでもう、夢見心地だった。

「お母さん、もっと取っていこうよ」

「もう充分だよ、もう持てないよ、ひとみ、早く、早く・・・・」

ひとみは水仙やチューリップをもぎとり、母親は桃の枝を折った。

ここは普通に通れば目に入らない所で山の尾根からずっと下に降りて窪地のようにになっている。普通では目に入る場所では無い。

両手に一杯の花を抱え、少し駆け上がり、今度は自分の家まで転げるように駆け下りてうちへ逃げ込んだ。たきぎは忘れた。

うちへ帰ってから

「お母さん、花泥棒は泥棒じゃあないんだよね、大丈夫だよね」と云ったら

「そうだって云うよ。盗んでもいいんだって・・・・・・・・」

そして二人は少しの間、顔を見合ってからアハハハハハと笑った。

二人とも、無理にこじつけたのはお互い判っていた。

「ひとみ、この花どうする??」

「うん、持っていく」

桜通りの角に駐留軍の司令部があり、司令官のリード中佐一家が住んでいた。去年のクリスマスの晩、家族で招待され、五人の娘と二人の息子はみんな安物の着物を着て、男の子もねまきのような着物でいった。ジープが迎えに来て、男の子は政治郎の車でいった。

めぼしい着物は戦争中、余所行き〔よそゆき〕のもんぺと上着に化けていたから本当に安物の着物だが、それでも喜んでくれた。アメリカ人に寝巻きと着物の区別がつく時代ではなかった。

ミセス岡本という綺麗な中年のご婦人が通訳として同席した。

リード中佐には奥さんと二人の女の子がいて映画に出てくるような広い応接間に通された時はびっくりした。うちだけで九人座ってもまだソファは余った。まるで映画の世界だった。

紅はこべに出てくるヴェルサイユ宮殿や、貴族のお城のような気がした。

〔紅はこべについて・・・フランス革命の時、革命軍に捕らわれている僧侶や貴族達を救い出してはロンドンに逃がす英雄の手の甲に付いていた赤いはこべのしるし、人呼んで 紅はこべ〕

リード中佐のお屋敷で出された飲み物は今思うとコーラだったが、飲みなれないので薬の匂いであまり美味しいとは思わなかった。

お母さんはそこへ持って行けと言うのだ。言わなくても分かった。だってあの頃、そんな豪華な花を飾るような余裕のある部屋に住んでいた人なんていない。焼け出され、引き上げてきて、間借りの部屋でギュウギュウ詰めの生活だった。

学校へ行くと先生が

「皆さんの所で家を貸してくれるところはあるでしょうか、お部屋だけでもいいんですが・・・」

なんていう時代だった。

うちのふとんなんて、まるでわかめのようだ。お花なんか飾る場所は無。どこの家だって同じだ。

それにもう一軒、桜通りにライアン少佐の家がある。旧李王さん（李王朝の末裔・まつえい）の別邸で、宮様の住むお屋敷だけあって、宮殿のような豪壮な造りだ。

「あんなお屋敷にペンキ塗ったりして」

とお父さんが嘆いていた。つき合いのあるこの二軒に私は山ほどのお花を届けた。自転車に乗って得意そうに、飛ぶように行った。

何度かは、近所の花やで買ってまで届けた。

この辺の山は花屋の所有だという。

あの頃花なんて安かった。特に市場へ出す前、近所のじいさんが作っていた花なんてひと抱えで十円位だった。

アメリカ人は派手な花が好きで、思わぬ余得が付いてきた。

「待って」

と云って中へ行って、こんどはひとみに抱えきれぬほどのチョコレートや、缶詰を持たせてくれた。味を占め、買ってまで持っていても、損はしなかった。食べ物のない時代だったから。

オキュパイドジャパン〔占領下の日本〕の子供だ。恥ずかしくなんかなかった。十三だもの。〔今じゃあ頼まれたって出来ねえ〕

花が変わると又、持っていった。いつも、沢山美味しいものを持たせてくれた。敗戦により占領された日本の飢えた少女に、彼らは優しかった。そしてライアン少佐の奥さんは女優のように華やかだった。

この人が私の真っ黄色のセーターと黒のビロードのスカートの持主だった。一生懸命マイガーデンチエリーブロッサムとかなんとか言ったが分かったのか、分からなかったか知らないが、いつもニコニコしていた。まだ、中学に入る前の休みを利用して、途中の英語塾で少し習った英語は幾らか役に立ったが、そんなに判るはずも無い。ろくに習わぬうちからそういうのだけ覚えた。

そのうち、その山が近所の花やの山本さんの持ち山だと分かったが、山本さんの家のどこにも花は見えなかった。戦争のさなか、食う物を作るだけで精一杯で、あその山のくぼ地は花の疎開先だったのかもしれない。兎に角咲きっぱなしで放っておいたのは事実だ。

資産家の花屋だけれど、米のほうが優先の世の中だったし、お花ばかりやっても売れない。

花を買うよりだんごの時代だ。だから少しはいいか？

「でも、これ完全に、花ぬすつとだね」

(リード中佐の奥さんは、もともと結核で身体が弱く、アメリカへ帰国の途中、船の中で亡くなられた、と後に通訳の岡本さんから知らせがあった)

花盗人から四十年経って・・・・

昭和六十一年二月八日未明、ひとみの父政治郎は黄泉(よみ)の国へ旅立った。親は当然我々より早く死ぬ。だから、弟の死(昭和四十八年十二月)より悲しまないだろうと思っていたひとみは慌てた。

まだ、何年か・・・・生きる、生かせる、と昨日姉と妹の三人で誓ったばかりなのに・・・・泣き明かした。何も手に付かなかった。泣いて、泣いて、泣き濡れた。約七年、肺気腫で医大付属病院に入退院を繰り返して、最後は大学病院の流れを汲む病院の一室を、自分の好きなように使わせて貰って、時々うちに外泊で帰っていた。

お父さんごめんね、お父さんごめんね、何度繰り返しても、お父さんは帰ってこない。これほど辛いことは無かった。自分も死にたかった。

この思いが幾らかでも晴れたのは、テレビ取材があって、テレビ局からこのお店が全国に放映され、その時画面いっぱいにお父政治郎の姿が映った時だ。ひとみは胸が一杯になって声が出なかった。分かっているながらウツソーっと思った。

平成十七年五月のある日、テレビ局と名乗る人から電話があった。

明日午後から社長さんのインタビューをさせて欲しい、放映はあさっての午後十時から、という事だ。

誰か女性の経営者で面白い人はいないかと全国の商工会議所に電話をして聞いたところ、全国で一番高齢の現役おんな社長との事で御社の社長さんの名があがったので、という。

腰が抜けるほどびっくりした。うちへ帰ってから

「お母さん、明日の事をお願いがあるんだけど」

「なんだい？」

「あした、テレビ局でお母さんにインタビューしたいんだって」

「なんで？」

訳も聞かずに母は

「嫌だよ」

と云った。

「いいじゃないの、お母さんは綺麗だし、うちの宣伝にもなるわ、出して欲しいって云っても出してくれる物ではないのよ」

何と言っても嫌だよと云ってベッドに入ってしまった。  
翌朝、どう説得しようかと思ったが、昨夜と違い簡単に  
「いいよ」と云ってくれた。びっくりしたひとみは気の変らない  
うちに、と着替えさせ、妹の運転で会社へ連れて行ってしまっ

た。  
丁度良い具合におととい美容院に行ってきたばかりの老女社長は  
、何をしなくても凜としてきれいだった。さすがに何十年と仕事  
に携わって来た女性だと思った。

会社へ行くともう大変だった。テレビ局はお昼頃来る予定だが、  
機器類がスムーズに通るようにエレベーターまで、置いてある物  
を整理したり、飾りの取れているところをなおしたり、掃除し  
たり・・・・

あちこちに土曜日に放映されると連絡したかったが、以前うちの  
お客様からの連絡で、取材されたので見て欲しいと連絡があった  
ので、その番組を見つめていたのに写らなかった。

テレビ局の人に、ボツになる事があるのですか？と聞いたら稀に  
あるとの事で、連絡は身内だけに止めた。



テレビで放映される取材など生まれて始めてだが、老女社長は難なく応じ、それほどたいした事では無いのでボツにはならないだろうと思いましたが不安だった。

放映の時間まで、二～三度インタビュアーの方から問い合わせがあった。その時間は怖かった。こわごわ覗いているとアレ不思議、画面いっぱいうちの建物が映り、下に社名がはっきりと映った。

母のインタビューが始まり店の内部が紹介され、そしてこの店を始めたのは・・・と政治郎の顔が映った。

父の写真もカメラに収めていったのは知っていたが、あんなに画面一杯に映ったお父さんの顔は誇らしげに感じられた。

初めていくらか恩返しが出来たと思った。

それまでひとみは父に対して、申し訳ない思いで悩み抜いていた。

。葬儀の時、周りで不思議に思う程、泣いてばかりいた。

何日かのち、近所のおばさん達が集まって、お念仏と言うのをやってくれる事になった。中でも先生格の人がいて、その人がいないと出来ないが幸いにその日は来られると言う。ひとみはお念仏というものを聞いた事も無く、全く出来ないが、絶対に一緒にお念仏を唱える、と云って待った。夜の八時頃、祭壇の前に近所の奥さん達が八人位集まった。物悲しい、うら悲しいお念仏が始まった。

チーンチーンと鉦（かね）を鳴らしながら唱和は続いた。

泣きながら懸命に和した。そして、お念仏とはいいものだ、と思った。死者を弔いながら、我も又、慰められ、鎮められていった。一時間近く、涙と共に唱えたお念仏は終わった。母がお礼を言い、一同お膳に向かった。

あのお念仏の先生は、昔ひとみ達が花泥棒をした花やの山の持ち主だった。母は最初から知っていた。ひとみは名前は聞いてはいたが、顔は知らなかった。その方がこの先生だったのだ。

だんだん宴もたけなわとなり母が先生に

「昔お宅の山荒らしをやったんですよ」

と言った。

「この娘(こ)とね？」

と私のほうを向いて笑って云った。それまでに杯（さかずき）を

交わしたり、「如何してそんなに泣くのかね？」

などと話をしていたので私も昔中学一年生の春、花泥棒をした話

をした。先生は笑って、

「戦争中なんて全然手をかけられなかったんだからいいんだよ」

と云って下さった。

「でも、たくさん頂いてしまいましたよ」

と云ったら、

「売るのは蕾のうちに取るのさ。あんなに咲かせてしまったも

のは、売り物にもならないし、第一、あの頃花なんぞ買う人い

なかったよ。わし等も行ってなんかいられなかったよ、あれは売

る為に作ったのではなく勝手に咲いただけだよ、もう、そんなの

、時効、時効」

と言ってみんなで笑い、しばし戦後の話の花が咲いた。花を盗ら

れていたのは、少しは気がついていたのだろうか、行っていなか

ったのは事実らしい。

四十年経ってやっと、ほっとした夜だった。

いいお念仏だった。

「お父さんは明日(あした)死ぬ。だからみんなを呼ぶように」

中学生だったひとみも、今はもう五十歳を越えていた。その間に弟を失い、そのまま事業を引き継いで、艱難辛苦はあったが何とかうまく時流に乗り、社員二十名を越す会社に成長していた。

戦争中から無線に力を入れていた父親の電気の方も、タクシー無線が当たり、更に一億総電化時代を迎えて毎年右肩上がりの成長を続けていた。

うちだけでなく戦後、何処もそんな景気の良い時代だった。

既に八十歳を越す父親政治郎は、数年前から肺気腫で入、退院を繰り返し、最近はずいぶん遠い大学病院ではなく、そこの流れを汲む、家に近い病院に変えて貰って行ったり来たりを繰り返していた。

この病院のあるあたりは底冷えのする寒い所で、特に市内から丁度農村部に入る入り口で、夏でも気温が一度は違う境目だ。

部屋はいつも同じ二人部屋を使わせて貰い、たまには隣のベッドに患者が入る時もあるが、大概は一人で使っている。広いだけあって夜は一段と冷え込むので政治郎から夜になると暖房の温度が低くなって寒いという訴えがあった。病院側と交渉の末、一応許可を得て、電気ストーブを一つ入れ、ついでに厚手のカーテンを付けさせて貰った。

佐藤インテリアの人がカーテンを付け替え、電気ストーブも一つ増えたので、幾らか暖かくなり、みんな安心していた時、病院から、

「お父さんが誰かに付き添って貰いたいとおっしゃるので、いらしてくださいませんか、少し疲れるらしいんですよ」

と連絡があった。

「ひとみは仕事だからお母さんが行くよ」

と云って母が付き添いに行ってからかれこれ一週間になる

二人部屋だが隣に患者はいないので母は並んだベッドに寝ていた

。

昨日その母から電話でお父さんが

「ひとみのスープが飲みたい」

というので昨日仕掛けたばかりだが未だ出来上がっていない。ひとみのスープは結構評判が良く、弟勝之も最期の時に姉さんのスープが飲みたい、というので、あの時は明日をも知れぬ重体であったからその日のうちに作って届けたが今度は未だ作り終わっていない。

時間をかけた方が美味しいのと、あれ以来、あのスープは一度も作る気がしなかったのではかばかしく手が進まなかったのも事実だ。舌(ぜっ)苔(たい)〔ぜったい〕の出来た真っ白い舌で、美味しいと飲んでくれた大匙一杯のスープを思うと、やるせなくて作る気持ちにはどうしてもなれなかった。

でも今度は父からのリクエストなので作り始めたけれど以前より大幅に忙しくなっていたのも手伝って二日ばかりになってしまった。今晚帰ったら仕上げようと思った。。でも、あのスープは弟勝之を思い出させるよすがとなってしまうと作るのも辛い。

そんな時、母から電話があった。

「お父さんは明日(あした)死ぬ。だからみんなを呼ぶように」

お父さんがそう言っている、と母からこんな電話が掛かってきた

。「嘘ばかり。お母さん、はいはいと言っていけばいいんだよ、そんなわけじゃないの」

と云って放っておいたら、又電話が掛かった。

「又、お父さんが、あした死ぬからみんなで来るように、って言っているんだけど、何度も言うから伝えておくよ」

と同じ事を言う。

ひとみは今度は直ぐ、群馬の姉に電話をしてその旨を伝えた。

「駄目だよ、すぐ行ってやらなければ、何で直ぐ行かないの？そういう時は行ってやらなくちゃあ、私も今夜行くから」

と言うので仕事の合間を見て、番頭の一郎さんと、役員の岡元さんと三人で病院に行った。快晴の日で窓の外はまだ、明るかった。この部屋から西の遥か彼方に良く晴れた日は富士山が見える。

富士山は今日も良く見えた。こんな日は一番気温が低いのだ。

「お父さん、大丈夫だよ、ほら、みんなで来たよ」

と言うと、力なく目を閉じたまま

「お父さんはあした死ぬからあとをよろしく頼むよ」

と云う。見たところ明日死ぬとは思えない。岡本さんも優しく

「心配しないで大丈夫ですよ」と云いながら肩を優しく撫でていた。

「岡元さん、あとをよろしくお願いしますよ」

と弱弱しく言うので岡元さんは繰り返し

「大丈夫ですよ、心配しないで」というより仕方がなかったようだ。何ともいいようがなく、うんうんと優しくお父さんに返事をするように頷き（うなづき）乍らベッドの傍らに立っていた。

そばにカラーテレビがついていたが、薄くてよく見えない、と言うので一郎さんがテレビを回したり調整したりしている。テレビを見ると普通に写っている。何とも手持ち無沙汰なのだろう。映っている画面を見ながらダイヤルを回し続けていた。一郎さんは父が商売を始めたとき以来、母がお嫁に来る前からうちにいる大番頭だ。



大丈夫、大丈夫を繰り返しつつ、仕事もあるので一時間位いたが病院を後にした。

その夜は妹と二人、仕事を終わってから病院に向かい、おとなしくやすんでいる父の傍らに立ち、遅くなって群馬から来た姉を迎えた。

すでに母は一週間、父に付き添って父の隣のベッドで生活していた。母はとなりのベッドで休ませ

「お母さんだけでは参ってしまうよ、これからは、三人で交代にお父さんに付き添おう」と約束した。

しばらく病院にいて父を励まし、あとを母に頼んで三人とも自宅へ向かった。姉が群馬へ帰ったのは、十二時を回っていた。

翌朝七時、まだふとんをかぶっていたら、電話が鳴った。  
お母さんの泣き声で

「お父さんが死んだ」と・・・

しまった・・・しまった・・・

あとは泣きながら、群馬の姉と、町内の自治会長と会社の者に電話した。

あした死ぬ、なんて、その通りに死ぬ人なんて、いるわけ無いと思ったから、・・・・・・・・・・しまった、しまった、

病院を引き上げるのは、会社の人がやってくれた。

木山と言う社員の奥さんが病院と関係のある看護婦さんだったので、その奥さんも駆けつけ殆どを仕切ってやってくれた。

机の引き出しの奥深く、一通の遺書が出てきた。

中にはただ、次のように書かれていた。

全ての物をひとみに贈与する

その他の事については一切をひとみの意思に任せて取り計らって欲しい  
政治郎

もう間に合わない、ただ、泣いて、泣いて、泣き明かした。

「お父さん、何で死んだの、何で死ぬのが判ったの、今迄そんな事聞いた事ないよ、何で死んだの？・・・」

机の一番下に、隠すように、母との結婚式の写真があった。泣きながら、「お父さんもなかなかやるね、泣かせるね」と姉と笑った。

ひとみは父の政治郎んに当ってばかりいた。ほかに当る人がいなかった。一番弱い政治郎に当ってばかりいた。ずっと、仕事をしてきたのはひとみだけけれど、会社での憂さを晴らす何ものもなく、政治郎

に当っていたのだ。葬儀が済んでも、頭の中は父の事ばかり。考え込むと底の底まで落ちてゆき、死ぬことまで考えた。そこに到達すると、親が、娘が何したところで自殺して喜ぶだろうか、と思い、這い上がれた。その繰り返しだった。

今、一番何がしたいか、と問われたならば、迷うこと無く、父に会いたい、と答える。

当たり所が無くて、親に当たっている人に言いたい。若し、苦しみたくなかったら、親に当るのだけは止めて、と・・・・・・・・

馬鹿な者に、親の恩が分かるのは、親が死んでから、という事だ。  
お父さんに言った言葉はそのまま、何万倍にもなって私の胸に突き刺さった。

「お父さんごめんね。こんなにも痛かったのね、何を言ったか、忘れてはいない。そのまま、放物線を描きながら、私の胸に帰ってきたわ。行ったきりではなかったわ。これが自業自得というものなのね。もう一度お父さんの子になりたい」

この頃少し分かりかけたことがある。それは、当る相手には、本当は甘えたいのだ。甘えの変形なのだ。素直になれない馬鹿者が当るのだ。

「お父さんごめんね、又お父さんの子にしてね」

政治郎はその朝、いつものように七時前に看護婦さんが検温に来て覗いたら、安らかな寝息を立てているので

「起こすのが可哀そうだから、もう少し経ったら来ます」と出て行った。

そのあと、二十分位過ぎて又来た時、看護婦さんのアッという声で母が振り向くと、  
「大変だっ、呼吸してないっ、先生を呼んできますっ」  
と走り去ったという。己の死を予告し、本当に大往生だった。

政治郎が、カラーテレビの色が薄くて見えない、と言ったのは、もはやろうそくの火が消えかかろうとしていたからだ、と後になって気がついた。

後日 姉登志子に 親はその死を以って子を諭す〔さとす〕のだ、と言われた。

この項 終り

作：ほりひとみ